

コロナ禍から学んだこと

松江市立湖東中学校 3年 福新啓恵

国内で初めて新型コロナウイルス感染者が確認されてから二年がたとうとしています。

ワクチンが開発され国内でも接種が始まり、感染者の数も減少すると信じていました。しかし、感染者の数は依然として減少するどころか、今度はデルタ株というコロナの変異株が世界を脅かし、増加の一途をたどっています。

このような「コロナ禍」の中、私が関心を深めたのは、「新型コロナウイルス感染症」に関わる差別事象です。

コロナ差別とは、感染者やその家族、親戚等に対して誹謗中傷や、いわれのない噂、作り話をつくったりして、相手の心を痛めつけることです。その例として、私が一番驚き、悲しかったのは、第一線で戦う医療従事者やその家族に対しての差別があるということです。私の友達にもご両親が医療従事者の方がおられます。本来であれば、敬意を払うべきなのに「感染してるんじゃないか」「自分や子供にうつたら怖い」など勝手に解釈し、相手が傷つくような言動や行動をとるのです。

こうした差別事象が起きる原因として私が考えたことは、自分や友達、家族がいくら気を付けて生活しても感染してしまう可能性があり、誰がどこで感染してもおかしくないという現状についてよく理解していないということです。また、自分や友達、家族は感染しないという根拠のない自信が何かしら心の中に存在しているからだと思います。私も最初は新型コロナウイルス感染症の真実やその差別について分ろうと努力しませんでした。そのために初めて松江で感染者が確認された時は心の中で「最悪」「どうせ都会に行ってたんじゃないの」と興味本位で思っていました。感染者の体と心の苦しみへの理解をしていませんでした。また、理解しようとしませんでした。

そんな中、私にもコロナを身近に感じる出来事が起こりました。母の仕事場でクラスターが発生したのです。その時私は初めて新型コロナウイルスが私達のすぐそばまでせまってきているという恐怖を感じました。感染された方は、何日もつらい入院生活を送る中、もしかしたら、自分が誰かにうつしたかもしれないという不安にかられ、仕事をやめないといけないうまで思ったそうです。幸い母や仕事場の人は念のためPCR検査を行い、皆さん陰性でした。でも、二、三週間は自宅勤務をしていました。母は、食事を取りに来る時だけ下に降りてきて、もしものため私達とほとんど接触することがありませんでした。長い間外出を制限し、ほかに被害が

及ばないように沢山のことに注意を払って生活していました。母は、感染への不安と、人と直接話し笑い合ったりできないことへのストレスでとてもつらかったと言っていました。

そんな中、母のもとには、ニュースを聞いて心配してすぐに連絡してくれた友達がいて人の温かさを感じたそうです。

このような母の話聞いて、私は人というのは本当に大事なんだなと思いました。

母が、「人を傷つけるのは人、でも人を助けるのも人。」

と言っていて、私はその言葉がとても心に響きました。最近、コロナ差別のほかSNSによる誹謗中傷によって命を落とすというニュースが多くなってきています。自分の人生をどこの誰だか分からない沢山の人の手に奪われ、その奪った沢山の人は、人の人生をめちゃくちゃにしたのにもかかわらず、自分は関係ないと本質から目をそむけ、ふつうに生活を送っているのです。実際SNSなどで命を落とした方達は誰かの助けを待っていたのかもしれませんが、誰かがその人を助けていたら一つの大切な命もなくなることはなかったと思います。このように、人の傷ついた心を治すことができるのは人にしかできません。命を救うために、少しの勇気と、やさしさで一人の人の人生を救ってあげることができるのです。

これまでコロナ差別について調べてみて、私が思ったことは、人間は人を差別するけどコロナは差別しないということです。対策を徹底している人でも、誰でもコロナに感染し、コロナは人を選びません。コロナだからとコロナを言い訳に使ってばかりいても、差別はなくなりません。誰かが先に進まないとも何も変わりません。自分にできることはなんなのか考えて、一人一人がコロナと向き合う必要があると思います。この先、何が起こるか分からない今、この先を決めるのは私達自身です。この世界からもっと楽しいことを増やして、差別がないような世界をみなさんでつくりあげていきましょう。